第十八回野尻湖クリルタイ

岡田英弘

第十八回クリルタイは、恒例に依って、一九八一年七月十二日（日）より十五日（水）まで、長野県上水内郡信濃町の野尻湖ホテルにおいて開催された。参加者は次の五十名である。

青木富太郎、海老沢哲雄（埼玉大学）、二木博史（一橋大学）、後藤晃（山形大学）、Bozkurt Güvenç (Hacettepe Üniversitesi)、萩原淳平（京都大学）、羽田明（四天王寺女子大学）、長谷孝章（山形大学）、橋本勝（大阪外国語大学）、本田実信（京都大学）、堀川徹（京都外国語大学）、細谷良夫（弘前大学）、池上二良（北海道大学）、石橋秀雄（立教大学）、石橋崇雄（東京大学）、神田信夫（明治大学）、片山共夫（九州大学）、加藤直人（日本大学）、河内良弘（天理大学）、菊池俊彦（北海道大学）、北川誠一（同上）、北村高（竜谷大学）、小山皓一郎（北海道大学）、久保智之（九州大学）、国木田明子（神戸市教育委員会）、李柏亭（東京大学）、間野英二（京都大学）、松田孝一（大阪大学）、松村潤（日本大学）、森川哲雄（九州大学）、森安孝夫（東洋文庫）、永田雄三（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）、中見立夫（同上）、小谷仲男（富山大学）、岡田英弘（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）、大沢陽典（立命館大学）、佐口透（金沢大学）、佐藤道郎（岩手大学）、沢田勲（金沢経済大学）、沢田稔（大阪大学）、設楽国広（東京都立千歳高等学校）、島田正郎（明治大学）、清水宏祐（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）、白須浄真（広島県立松永高等学校）、鈴木隆一（早稲田大学）、植村清二（国士舘大学）、梅村坦（東洋文庫）、山田信夫（大阪大学）、山谷輝美（日本大学）、吉田金一。

これに羽田先生の御子息、それにギュヴェンチ夫人と令嬢のチャーさんが加わった。参加者は常連が多く、新しい顔は五名、女子は二名のみであった。

第一日の七月十二日は、現地集合、七時の夕食後、自己紹介。

十三日、午前の第一セッションはConfessionsの第一部であった。

青木は昨年、入院手術のため欠席。池上は京都産業大学国際言語科学研究所主催の International Symposium on the Genetic Relationships of the Japanese Language に参加、

ツングース諸語と満洲語の間の動詞接尾辞の用法のちがいについて発表。PIACでは「遊牧」という漢語の起源について発表、その要約が「民博通信」に載る。石橋（秀）は父丑雄の宦官に関する遺稿を整理。植村は『人物中国の歴史』（集英社）に「フビライとマルコポーロ」を書く。梅村は『講座敦煌』に「敦煌探検研究史」、「敦煌の種族構成」を寄せ、『中嶋敏先生古稀記念論集』下巻に「吐魯番県展覧館展示回鶻文公文書」を発表。海老沢は『至順鎮江志』により元のMar Sargisの遺跡を考える。大沢は『三田村博士古稀記念東洋史論叢』に「慕容燕から馮燕へ」を書く。岡田は京都産大の国際シンポジウムでは"From Chinese to Japanese"を読み、十二月二十一―二十九日には神田、松村、細谷とともに中国社会科学院の招待で北京を訪問、その見聞を「中国病に根本療法はあるのか」（『中央公論』四月号）として発表。五月三十一日―六月五日、韓国国際文化協会の招待でソウルを訪問、国防大学院安保問題研究院と外務部外交安保研究院において講演を行った。小谷は鳥取大学より転任、ガンダーラ仏教美術より見たる東西交渉を講ずる。片山は四年ぶりの参加、「元朝怯薛と官僚制」、「元の郷先生について」、「元の尚書省について」を発表。加藤は台北で軍機処檔案を研究。河内はNišan Saman-i Bitheの訳注を進める。

神田は東洋文庫清代史研究室で『鑲紅旗檔 乾隆朝』を編纂中。「清代史の研究と檔案」（『駿台史学』）、「満文老檔から旧満洲檔へ」（『人文科学研究所年報』）、その英文訳（『東洋文庫欧文論叢』）、「中国第一歴史檔案館訪問記」（『東方学』）を発表。菊池は『礼文島香深井遺跡発掘報告書』下を出す。このオホーツク文化の遺跡に、渤海国東京城と同型の土器が出る。北川はアフガニスタンのニクダリヤンを研究、この部族がティームールによって千戸に再編されてハザーラ族になったかと考える。北村は元朝の色目人と仏教の関係を研究、観経のウイグル訳者について書く。Güvençは三年ぶりの出席。日本文化に関する大著をトルコ語で発表。現在、アジア・アフリカ言語文化研究所客員教授として現地調査中。国木田は神戸市立博物館創設準備室に勤務、館のテーマは「国際文化交流 東西文化の接触と変容」。久保は満洲語を研究、「満洲語従属文の主語及びbeについて」を書く。後藤は写真集『メッカ・メディナ』に解説を書き、『ムハンマドとアラブ』を出版。

午後の第二セッションは、Confessionsの第二部と海外事情報告があった。

佐口は『新疆少数民族社会史研究』（仮題）をまとめつつある。佐藤はインド、ネパールのチベット人学者に質問して回答を録音、「仏教からのヒンドゥイズム批判」、「朝鮮の禅宗の伝灯について」を発表。沢田（勲）は突厥碑文を読み、

「匈奴骨都侯について」（『日本海文化』）を発表。沢田（稔）は十六、七世紀の東トルキスタンを研究、「カシュガル・ハーン家とベクたち」（『待兼山論叢』）を発表。設楽は「青年トルコ党とオスマン朝軍」（『中嶋論集』）を発表、オスマン朝の官報を読む。島田は『東洋法史論集』第三輯〈清末における近代的法典の編纂〉、「清朝蒙古例の研究十七、十八」、「清律の成立」を刊行、台湾で『中国法制史料集要』第二、三輯を出す予定。法制史訪中団に参加。清水は助手等現地投入プログラムで一九七九年六月から一九八一年三月までエジプト、トルコに滞在。白須は「唐代トルファンの豪族」二篇を発表。鈴木は青海・チベット史を専攻、宋代の青唐族について書く。永田は山川出版社の『世界現代史 トルコ・イラン・アフガニスタン』のトルコの部を担当。中見は台北の故宮博物院と中央研究院近代史研究所を訪問、前者で「収発電檔」「寄電檔」「電寄檔」を研究、シドニーのミッチェル・ライブラリーでG・E・モリソンの個人文書を見、アジア政経学会で「帝制ロシアとモンゴル独立」を発表。荻原は一九七五年以来モンゴル学術調査に従事、『明代蒙古史研究』を出版、羽田記念館公開講演において「皇帝のモンゴル親征について」語る。橋本は一九七八年十月から一九七九年十一区までウラーンバートル大学で日本語を教え、R・A・ミラーの『日本語とアルタイ諸語』の訳を出版。

海外事情報告は池上と神田であった。

池上は「ハンブルグの中央アジア・シンポジウムに参加して」と題して、このSocietas Uralo-Altaica 主催、ハンブルグ大学後援で、A・フォン・ガバインの八十歳を祝って開かれた、「中央アジア研究の新成果」をテーマとするシンポジウムでは、中央アジア諸語におけるサンスクリットの借用財(Lehngut)、トカラ語、コータン語、ウイグル語などにおける飜訳技術が多く扱われたこと、および自らは「ツングース語における言語地理学的問題」を発表、文法構造における蒙古語の影響、沿海州・黒竜江下流・カラフトの諸語、ウイルタ、アイヌへの満洲語の影響、エヴェンキ語東方方言とエヴェン語の類似が分裂以前からものと見られることを論じた。

神田の「中国第一歴史檔案館・北京図書館・人民大学の満洲文献」は、一九八〇年十二月二十一日より二十九日まで、松村・岡田・細谷とともに訪問した北京での見聞を語った。

中国第一歴史檔案館では、『満文老檔』の有圏点本・無圏点本・草本を見、『天聡九年檔』二種を台北故宮博物院本と対校して、後者がより早いことを確かめ、また『順治十一年戸科檔』、『内務府檔』康熙初年分を見た。最後のものは口頭の上奏・裁可を満洲文で記録した詳細なものである。ここの

閲覧室で Silas Wu（呉秀良、ボストン大学）と出会った。ほかにもアメリカ人多数が北京に腰を落ちつけて研究している。北京図書館では民族語言図書組の黄潤華氏の世話で、李徳啓の『満文書籍聯合目録』に登録された書籍・文書を見た。『百二十老人語録』が二部収蔵が増えている。『大清会典』康熙本には欠巻がある。「佐領執照」(temgetu bithe) 数十点があり、「印軸」と呼んでいる。『崇徳三年檔』の青写真も見た。現在、満洲本の聯合目録と満洲文碑銘の目録が編纂中である。

夕食後、細谷が北京旅行のスライドを映写した。

十四日、午前の第三セッションは、Confessions の第三部と、シンポジウム「宮廷」の第一部があった。

石橋（崇）は清の包衣 (booi) の研究を修士論文にまとめ、『宮中檔康熙朝奏摺』第八、九輯に収められた覚羅満保（Gioroi Mamboo）の摺奏を整理している。小山は東洋文庫に国内留学中、オスマン朝の写本を読む。ロベール・マントラン『トルコ史』（クセジュ文庫）の改訂版が出る。羽田は著作集『近世中央アジア史の研究』（約四五〇頁）を編纂中。一九八三年の CISHAAN（国際東洋学者会議）に分科会「アルタイ系民族の歴史と文化」を担当する。二木は清朝期のモンゴル社会史、ことに法典を研究、「白樺法典について」（『アジア・アフリカ言語文化研究』）、「訳注白樺法典」二（『モンゴル研究』）を発表。『モンゴル人民共和国史』（三巻本）の下巻の翻訳が進行中。細谷は『鑲紅旗檔 乾隆朝』の準備中。『宮中檔雍正朝奏摺』十三年の分を研究、佐領の番号の確定の経緯を明らかにした。北京図書館で『旗地則例』を発見。堀川はインディアナ大学のために "Turkish studies in the 1970's in Japan" を書き、Churas Tarikh の訳注の原稿の前半を『内陸アジア史研究』創刊号に載せる。

本田は暗殺教団の山城阯の調査の総括に忙殺されているが、十四世紀の書簡文範を手がかりにイランの官制を整理中、演習では Rashid al-Din を読む。松田は「武宗海山の出鎮」、「トルイ家の所領の形成と継承」を書く。間野はティームール朝史の研究をつづけ、Babur Nama を読了、「バーブルとヘラット」、「ナクシュバンディー教団に関する覚書」を書く。森川は「最近のソ連における遊牧封建論争」（『史学地理学論叢』）、「Altan nabčitu teike」（『モンゴル研究』）を書き、後者を十八世紀のチェチェン・ハーン部の年代記かと考える。森安は「重修文殊寺碑」（一三二八年）の裏面のウイグル文のペリオのローマ字転写の誤りを修正。山田は「民族形成——匈奴の場合」、「シルクロード——東から西へ、西から東へ」を書く。山谷は流鏑馬から西アジアの馬具に興味を持ち、ユダヤ教の「外典」を読む。吉田は Myasnikov から聞いた Spafari 関係の満文奏摺のレニングラードにある木版

本は、北京の俄羅斯館における満洲語学習のテキストだったかと考える。「郎坦の吉林九河図」（『東洋学報』）、「ネルチンスクにおける講和会議の経過について」（『市古論集』）を書く。李は東京大学大学院研究生として魏晋南北朝時代史を専攻。

つづいてシンポジウム「宮廷」の第一部として、小山の「ムラト二世の宮廷」があった。

オスマン朝トルコの始祖オスマン一世には宮殿はない。二代スルタン・オルハンはブルサに居り、一三三三年イブン・バットゥータが来訪している。この時代のスルタンは戦士をひきいて巡回をつづけ、妻のハトンはイズニクに居た。宮殿は木造建築だが、公共建築物は石造であった。三代ムラト一世は一三六三年エディルネ（アドリアノープル）を占領し、以後ここが軍隊の集結地となり、スルタンはエディルネに居ることが多くなった。建物はやはり木造であった。六代ムラト二世（一四二一―一四五一）のときに大きな宮殿を造り、やはり木造であった。一四三二年、レヴァント地方に隠密旅行をした、ブルゴーニュ公フィリップ・ル・ベルの家臣、Bertrandon de la Broquière は、ミラノ公フランチェスコ・スフォルツァの大使に扈従してムラト二世の宮廷に参内しているが、その報告によると、スルタンの宮廷の第一の門を入ると、二、三十人の奴隷（kapıcı）が棍棒を持って、開放された門を守り、一人の長（kapıcı başı）がいる。門の傍に坐ってスルタンの出御を待つので、宮廷を「門」（kapı）という。三人のパシャ（三人の vezir と Rumeli beylerbeyi）その他の高官たちが集まったとき、スルタンは自分の部屋を出て、小姓たちだけに伴われて謁見用の柱廊式の広間に進み、ビロード張りの寝台状の座につく。他の人々も入って壁に沿って着席する。ミラノ大使が式部官に先導されてスルタンに近づき、スルタンは立ち上って礼を受ける。スルタン以外の人々は食事をする。スルタンは私室以外では決して食事をしない。出御のときからずっと楽人が祖先の武勲詩を歌い奏する。謁見のときからスルタンの回答が与えられるまで、納戸方（hazinedar）が大使に手当を払う。このようにはっきりした外交儀礼がすでに確立していたが、この記述は禁欲的な感じを与え、スーフィーに傾向したムラト二世の面影が出ているようである。スルタンの妻子はおそらくブルサに住んでいたのであって、五十人の妻をときどきエディルネに呼び寄せていた。この風は後まで変らず、スレイマン大帝（一五二〇―一五六六）のときまでハレムは宮廷とは別であった。

中食後、遊覧船で湖上を一周した。

午後、遅れて到着した松村が、Confessionsとして、「アミン・ベイレの生涯」（『日本大学紀要』）、「東洋文庫所蔵の満洲語文献」（『史叢』）を書いたことを報告、つづいてシンポ

ジウムの第二部として、間野が「スルタン・フサインの宮廷」を論じた。

フサイン・バイカラ（一四七〇—一五〇六）はティームール朝のスルタンで、ヘラートに都したが、バーブルの記述によると、町は大体正方形の城寨で、北郊外のインジル水路に沿って五つの庭園（bāgh）があり、スルタンはそこに住んだ。シャー・ルフは Bāgh-e Zāghān、フサインは Bāgh-e Jahān-ārā で、大理石造の小宮殿がその中にあった。「門」(ishik) が宮廷を意味し、また dargāh ともいった。宮廷に居る人々は、㈠軍事貴族（amir、その長が amir-al-umarā）、㈡聖職者たちの最高指導者（ṣadr）、㈢財政長官（wazir）、㈣学者たち、㈤詩人、㈥書家、㈦画家、㈧楽師、㈨力士、となっており、このほかに㈠王子（mirzā）十四人、王女（begim）十一人、㈡妻（khatun/begim）、妾（ghunchachi/aghacha）が居住していた。ティームール朝の宮廷の特色は学芸にたずさわる人々が自由に出入することで、図書館（kitāb-khāne）もこうした庭園にある。気風はインフォーマルで酒をよく飲む。フサインは昼の礼拝が終ると、一日も飲まなかったことはなく、酒席には女性も出てくる。バーブルはもとは飲まなかったが、ヘラートを訪れてからは飲むようになった。宮廷の官職のなかには qorchi など、モンゴル帝国時代からのものも残っており、イスラムとの混合であった。

片山「元朝の所謂怯薛執事について」は、ケシクが職掌の組織上、二重構造になっており、宮廷に奉仕する者の周辺に下級執役者の集団があったことを論じ、㈠天子の身辺の世話をする者、㈡武装して護衛をする者、㈢文書・銭穀を司る事務官、㈣家畜・奴婢の管理に当る者、㈤その他、国家の公事に関しながら宮廷に編入されている者、に分類、㈠宝児赤（飲食を掌る）、㈡荅剌赤（酒を掌る）㈢舎利別赤（シャーベット作り）、速古児赤（傘持）、㈤主剌赤（灯火、清掃を掌る）、㈥八剌合赤（城門を掌る）、㈦失宝赤（鷹匠）などについて詳述した。

石橋「清初のボーイ（booi）」は、これが booi aha の略称ではなく、すべてが奴隷であったとするのは当らないこと、皇帝は自分の内務府を通じて、諸王の王府とその包衣をも統轄していたこと、八旗都統が王府とその包衣の間に介在していたことを論じた。

つづいて海外事情報告の続きとして、清水「カイロ及びアンカラの文書館」があり、アラブ写本研究所（Maʻhad al-Makhṭūṭāt al-Arabiya）と国立文書館（Dār al-Kutub）で発見したセルジューク朝の史料について報告した。

夕食後、総括討論があり、十五日の朝食後、正式に散会した。